



ショートストーリー

「しおりがわりに」

文：山村光春 写真：伊東俊介

おそるおそる声をかけると、彼女はむくりと顔を上げた。そして僕を見るやいなや、最初への字だった口がぼかんと開き、やがて下のくちびるがむっと突き出たかと思うと、ついには大声で泣き出してしまった。
エーン、エーン。

まさか今どき……とも言うべきベタな泣き声で、こっちがあっけにとられるほど大仰に。

彼女と最初に会ったのは……いや、ただこっちが一方的に目にしただけだが、ともあれ朝の通勤電車の中だった。



職場が街の中心とは逆方向なので、車内はいつもさほど混むことはなく、乗って20分もすれば、座っていても向かいの窓からの風景がよく飛び込んでくる。ちゃちなラブホテルに病院、2×4の住宅、住宅。学校に桜の木に電信柱、そして川。人生劇場の舞台よろしく、右から左へさまざまなものが通りすぎていく。美しかろうがなかろうがまったくもって関係なく、それらが朝のかたむいた陽射しを遮り、くるくるとまたたく間に日陰になったり、日なたになったりするさまは、なかなかどうして、実にドラマチックだった。毎日見てはいるけれど、その日はとりわけ光が強く鋭く、ノリが実によかった。

この決定的瞬間を見て、感じている人はいるだろうか、視線を前のシートに向ける。

左からケータイ見てる、寝てる、ケータイ見てる、ケータイ見てる、寝てる（あられもなく）。隣のシートに移ると（こっちも）ケータイ見てる！

絶望的な気持ちで首をぶうんとふると、車両の隅っこに窓の外を見ている人影が見えた。

それが彼女だった。

年のころはばっくり20代のまん中くらいだろうか。もう気温はあたたかく、ずいぶんと春めいているのに、深みどりいろのストールを首にぐるぐる巻き、洗いたてのようなつるんとした肌に頬が少しあかい女の子。

ドアに身体の左半分をあずけ、頭はガラス窓にくっつけてさも眩しそうな表情で、せわしなく変わる光と影を見ていた。

そして両手を胸で交差させ、抱えこむようになかっこうで本をたずさえていた。ちょうど読みかけなのだろう、右手の人さし指を本の間にはさみ、しおりがわりにしていた。

僕はいま、この美しさを感じているもの同

士として、さも勝手な親近感を抱いていた。いや、正直に言おう。彼女の顔に、たたずまいに、しおりがわりにした人さし指に、たちまち恋をしてしまったのだ。

彼女はしばらくすると、ゆっくり本を開いて視線を落とし、話の続きを読みだした。僕はもう外の景色より、彼女の一挙一動をガン見していた。

右足をときどき上げ、甲のあたりで左足のふくらはぎをなでるようにクロスする。それは彼女のクセらしかった。誰かが知らないうちに行っている動作は、本人がおそらく意識しているいまいにかかわらず、秩序のかつダンサブルで、はたからみているほうは、それがおもしろくってしょうがない。

もうひとつ。彼女のクセとも言えるのは、ずっと本を読んでいないこと。少し読んで顔を上げてしばらく外を眺め、また読んで、と目は定期的に行ったり来たりしていた。

確かに彼女は僕と同じ外を見ていた。けれど、ほんとうは何か別のものを見ているような気がしてならなかった。

ある駅で電車は停まった。彼女は何かに弾かれたようにびくりとし、きよろきよろと辺りを見回したかと思うと、ひょいと軽やかに電車を降りた。本もバッグにしまわれることはなく、また人さし指の間にはさみ、右手に持ったままだった。

そして歩き始めようとした瞬間、本にはさまれていたしおりがはらりとホームに落ちた。でも彼女はそれにちっとも気付くことなく、そのままさっさと行ってしまっている。僕は一瞬ためらったのち、ドアが閉まる瞬間に電車を降りた。

好きだということ。好きすぎて、それゆえにすぐに読み終えてしまうのが惜しくて、本に出てくる人たちとお別れするのがさみしくて、ぐっと入り込みそうになると読むのをやめて、言葉を深く噛みしめ、できるだけ少しずつ読み進めるようにしていること。その、顔を上げた時に見える景色は、できるだけ何も世界を壊さないほうが良いということ。その点公園はいちばん適しているので、毎回クライマックスになると、電車に乗ってわざわざ公園にやってくること。「そしたらね、本の中のシーンも公園になったんです。主人公の女の子が、ここに別れた恋人がよくここに来ると知って、もう一度会いたくて公園に探しに来るんです。偶然を装おうと思ってたら、向こうの方から声をかけて来て。その時、ほんまにその瞬間においさんが声をかけて来たんです。だからめっちゃびっくりして、ほんまどうそがよう分からんようになってもうて……………」

僕は人さし指を口の前に当て、しいっと言った。

「ほら、うぐいすの鳴き声が聞こえてけえへん？ほらほら」

すると彼女は耳を澄ましながら、僕につられて人さし指を口の前に当てるしぐさをした。

それはさっきまで、彼女がしおりがわりにしていた指だった。